

詰将棋全国大会レポート（6）

第6回全詰連全国大会

1990年5月

東京都 日本将棋連盟にて

参加者 111名

詰将棋パラダイス 1989年4, 6, 7月号より

各自それなりに楽しんでいましたが、イマイチ盛り上がり欠けていたようです。やっぱり大勢で一つの盤を囲んでワイワイやっているのが一番ですね。これからは、このようなことのないよう、皆さんもACTIIの会合にどん

どん参加して下さい。(特に、東京近郊に在住の方、宜しく) 詰棋の好きな人なら誰でも大歓迎です。今まで詰棋の会合に行ったことがないという人も、気楽に一度来てみて下さい。大勢でやる詰棋というものも

結構面白いですよ。詳しいことが知りたくなった方は、〒270 松戸市根木内102-111 ケーオーコーポ201 有山方 摩利支天氏まで

〈日時〉平成2年5月3日、午後1時

—9時(午前11時受付開始)

〈会場〉日本将棋連盟4階和室(東京都渋谷区千駄ヶ谷2-39、電話03

—408—6161)

号)を左折、最初の路地を右折する。

〈会費〉4000円(懇親会費を含む)

〈宿泊費〉2000円(素泊り。予約が必要)

〈予約申込先〉門脇芳雄宛(〒169

平成2年度 全詰連全国大会

〈交通〉JR中央線千駄ヶ谷駅下車

(東京駅からは中央線お茶の水駅で中央線各駅停車の電車に乗り換える)。

改札口正面の駅前大通りを渡り、直進5分、鳩森八幡神社の四つ角(宿

東京都新宿区高田馬場4-25-8、電話03-368-4905)

◆出席及び宿泊の予約は4月25日まで

に右記へ連絡をお願いします。大会運営の苦勞を御賢察の上、早い目に

ご予約下さい。特に宿泊希望者は定員の都合があり必ず予約して下さい。宿泊の予約は定員15名になり次第、締め切らせて頂きます。

◆今年の全国大会は、昨年亡くなられた七條兼三、黒川一郎両氏の追悼会を兼ねて、東京で開催します。詰将棋の解答競争や懸賞など多彩な催しを計画していますので、多数のご参加をお待ちします。誌上で旧知の会員の歌を高らかに歌い上げましょう。◆大会の世話人は、関東支部会員の有志が勤めます。

主催／全日本詰将棋連盟

第6回

全詰連全国大会

参加者100人越えた!!

去る5月3日、黒川、七條両氏の追悼を兼ねた第6回全詰連全国大会が東京・千駄ヶ谷の日本将棋連盟で行われ、全国から111人の参加があった。詰将棋の大会で100人を越えたのは初めてのこと。

日本将棋連盟からは二上達也会長、

伊藤果六段、堀口弘治五段が出席。全詰連の存在が認知されたという点でも、非常に意義のある大会だった。

当日の進行は次の通り。

〈第1部〉進行 門脇芳雄

○開会挨拶（門脇芳雄）

○祝辞挨拶（二上達也、永井英明、宇

佐見正、森田正司）

○黒川、七條氏へ追悼の辞（岡田敏、駒場和男）

○黒川氏十段位追贈

○自己紹介

○柳原編集長挨拶

○岡田氏詰棋王位贈呈

○祝電祝辞披露

〈第2部〉進行 柳田明

○記念講演「コンピュータと詰将棋」
（小谷善行農工大助教授）

○懸賞付き解答競争

○全詰連今後の運営に関する討論

○閉会の辞（田代達生）

○記念撮影

〈第3部〉（懇親会）進行 角建逸

○乾杯の音頭（越智信義）

○アトラクション

・伊藤果六段、堀口弘治五段五面指し

・懸賞付き記念詰将棋出題（二上達也、

伊藤果、山田修司）

・福引

●出席者

岩手 佐々木聡

宮城 佐藤正義

福島 橋本哲

茨城 大須賀晃、長谷川克己

群馬 北川明、北爪孝昌、安永三三朗

埼玉 小谷義行、篠原昇、橋本孝治、

服部敦、深井一伸、三谷郁夫、山形

達也、湯川恵子、湯川博士

千葉 石川英樹、加藤玄夫、小林敏樹、

駒場和男、橋本浩文

東京 秋元龍司、天野竜太郎、安藤俊

之、池沢次朗、池田俊哉、伊藤明治、

伊藤果、伊藤三雄、大橋健司、岡村

孝雄、岡本真一郎、越智信義、門脇

芳雄、金子清志、川清雄、久津間正

勝、護堂浩之、篠田正人、角建逸、

須賀源蔵、鈴木守、相馬康幸、竹中

淳夫、多田茂、田辺元昭、嵩明、恒

川純吉、富樫昌利、豊田亨、永井英

明、永島勝利、仲西哲男、中村洋、

西田尚史、原岡望、平田正、福田稔、

藤井国夫、二上達也、堀口弘治、森

田正司、山崎泰史、山下誠、山村浩

太郎、湯村光造

神奈川 飯尾晃、飯田厚、磯田征一、

馬詰恒司、近藤郷、塩野入清一、鈴

木昭男、鈴木龍晴、清野広美、宮地

寛、森敏宏、柳田明、和田登

山梨 柴田三津雄

長野 添川公司

岐阜 柳原裕司

静岡 新井健、佐野公男

愛知 清水一男、関半治、成田忠雄、

堀内真、山田剛

三重 森美憲

京都 上田吉一、太田慎一、川ノ上帆、

田代達生、山下雅博、山田嘉則

大阪 明石六郎、高坂研、浜田博、林

泰伸、弘光弘、若島正

兵庫 伊藤正、宇佐見正、喜多真一、

水上仁

奈良 岩本修、岡田敏

島根 高見秀夫

香川 斎藤博久

●寄贈

秋葉原ラジオ会館(金五万円)、近

代将棋社(金二万円)、鶴田寿美子

(金二万円)、創棋会(金二万円)、

詰将棋研究会(金二万円)、岡田敏

(金六千円)、湯川恵子(金五千円)、

柳田明(金三千七百円)、岩谷良雄

(金三千円)、門脇芳雄(賞品一式)、

二上達也(賞品多数)、藤井国夫(賞

品多数)、森田正司(賞品多数)、柴

田三津雄(銘酒一本)

●祝辞・祝電

岩谷良雄、柏川悦夫、小西逸生、柴

田昭彦、田辺重信、谷川浩司、日野秀

男、山田修司

【編集部から】

大会の詳しい模様は来月号に報告し

ます。来年の全国大会は大阪で行う予

定です。大会の運営に当たられた方々

をはじめ皆さんにお礼申し上げます。

(文中敬称略)

第 6 回 全 国 大 会 全 詰 連 全 国 大 会

レポート / 柳田 明



昨年の5月に名古屋で詰バラ四百号を記念する全国大会が開かれたのは、皆さんご存知の通りである。「それなら今度は東京でもやらすんばなるまい」てな訳で、門脇芳桂氏の音頭により東京全国大会の計画がスタートした。

「名古屋の84名は上回りたいものだけど、そんなに集まるかな」

「いやいや、交通の便も良いし、百名は堅いよ」

「百名といったら普通の解答競技なんか不可能じゃないの？」

期待と不安の入り混じる中、ついに幕は切って落された。

異様なる集団

平成2年5月3日、東京は千駄ヶ谷にある日本将棋連盟に集まったのは、なんと111名。当日の受付は服部敦氏を中心にACTIIの若手にやっていただいたのだが、次々と押し寄せる人の波に大わらわ。運悪くお隣りで学生の



会（見分けがつきにくい！）をやっていたのでかなり混乱があったようだ。いく部屋かをぶち抜いた大広間を見ただ時には「果たして一杯になるのかしら」と思ったが、みるみるうちに満員になっていく。将棋盤を置くスキも無いほどである。大会が始まった後、一

般の将棋大会の人達（ここは将棋連盟なのである）が不思議そうな顔をして会場をのぞき込んでいく。それもそのはずで、これほどの大人数が集まっているのに将棋を指していないどころか盤、駒さえ見当たらない。連盟の中の異様な集団と言う他ないのである。

昨年の大会同様、今回も非常に天気には恵まれた。屋内でやるのだから晴れでも雨でも関係ないじゃないか、と思われるかもしれないが、仮に11本の水をしたらさせた傘が集まったらうまく処理できただろうか。間違っただけでいく人も出ただろうし、さらにコートは、長グツは、と考えると背すじが寒くなる。詰棋人はよほど日頃の行いが良いみたく、この幸運がこれから続くのを期待しよう。

さて会場に入ると大盤に実戦型作品が並べられている。（誰の作品だろう）待っている人達が考えているが、駒数が少ない割に意外と難しい。

「待てよ、これは変化だぞ」

「意外と長いね、これ」

「ここに歩を置いたらもっと良くなるんじゃないの？」

これだから詰棋ファンは恐い。

歴史的なあいさつ

さていよいよ開会である。まずは二上達也将棋連盟会長の祝辞であるが、場所が場所だけに当り前と思われた方ばかりだと思う。しかしよく考えていただきたい。全詰連の大会に将棋連盟の会長が出席してあいさつする、というのはスゴイ事ではないだろうか。ひと昔前には絶対に考えられなかった事であり、これは歴史的なひとコマと言ってもよからう。二上会長はひとりの詰将棋愛好者として、本当に気さくな態度で出席していただいた。また詰将棋の出题、景品を多数提供していただくなど、色々とうございませした。

続いて近代将棋の永井英明氏。近将は詰バラといっしょにスタートを切り、創刊40周年。亡くなられた七條兼三氏の思い出話をまじえながら、自誌のPRも忘れない。

さらに創棋会の宇佐見正氏、詰将棋研究会の森田正司氏と両代表のごあいさつが続く。両氏ともすでに詰将棋界



▶追悼の辞を読む駒場和男氏

の顔であり貫禄十分である。

黒川・七條氏への追悼

今回の全国大会の大きな目的のひとつとして、昨年の暮れに相次いで亡くなられた黒川一郎、七條兼三両氏への追悼を欠く事が出来ない。このふたりの巨匠については詰バラ誌上でも色々書かれているので今更ここでくり返す事はしないが、詰将棋界にとってあまりに大きい損失であった。駒場和男氏が七條氏へ、岡田敏氏が黒川氏へ、それぞれ追悼の言葉を贈られた。水を打ったように静まった会場で、あたかも故人がそこにいるかのように一言一言を語りかけていく両氏の追悼の言葉は、仲々に感動的であった。

先に七條氏へ詰棋十段が追贈されたが、当日、黒川氏へも十段位が追贈される事となり、柳原編集長から黒川氏の御遺族へ手渡された。

当日は谷川名人をはじめ、多数の方

から祝電をいただいたが、その中で小西逸生氏の軽妙な句を紹介して、この締めくくりとしよう。

駒音に 翁・聖の 笑い声

大いなる発言

大いなる発言というのは要するに出席者全員の自己紹介の事であるが、なししろ11名もの大人数である。名古屋の84名で2時間以上もかかっているし、関係者としては何より時間が心配であった。あまり長々とやられては困るし、また短すぎても味気ない。

どうなる事かと思っていたが、案ずるより生むが易し。司会の門脇氏の手綱さばきも鮮やかに、軽快なペースで進行していく。全体で約1時間半ほどで無事終了した。本当はひとりひとりの発言を紹介していきたいのだが、それは無理というもの。当日のプログラムのなかでは最も長いものだったし、これが一番面白かったという声はほとん

どだった。バラ誌上で名前はよく知っていても本人を見るのは初めてという人が多い。個人的に興味深かった人をあげておくと、加藤玄夫（有田辰次）氏や伊藤明治氏（新しい人は知らんだらうなア）。

まあ全員のあいさつを聞きなければ（見たければ）やはり出席するしかないのである。くやしいと思う人は次から出席して下さい。

湯川チエツク！

今回、一般の将棋界から（つまり詰棋界以外から）湯川博士、恵子夫妻が参加された。ズバリ書いておくが、湯川さんたちの目から見れば詰キストなどエイリアンに等しいはずである。例えば、前日の最終打ち合わせが終わった後、ささやかな前夜祭をやったのだが、私と角建逸氏で話し込んでいて（当然専門用語が飛び交っている）つい笑い声が大きくなると、恵子さんが「この

人たち、また、自分たちの世界に侵ってるワ」と冷たい視線を飛ばすのである。

「大いなる発言」の間、博士さんは取材メモを取りながら時々私の方へ鋭いチェックを飛ばしてくる。

「ACT II って何？」

「えーと、まずACTという団体がありまして、角さん、ACTって何の略だっけ？」

「かしこ詰って何の事？」

「えーと、それはですね。パカ詰とこのようにジャーナリストのチェックは実にきびしい。この原稿が活字になる頃には両湯川さんが今大会をタネに各誌にエッセイを載せているかと思うが、どんな視点から我々の事をながめていたのだろうか、興味津々である。

さて長大なる自己紹介の最後を柳原編集長のあいさつで締めくくっていたのだ。そして先ごろ詰バラ入選三百

回を達成した岡田敏氏へ柳原編集長から「詰棋王位」の称号が贈られて（これは故田中至氏に続いて史上二人目）、これにて第一部が終了した。

コンピュータと詰将棋

何とここまでは詰将棋が一切出てこなかったが、第二部では詰将棋を楽しんでいたかどうかという趣向である。司会も門脇氏から私にバトンタッチ。

まずは記念講演で、東京農工大助教授の小谷善行氏（勿論、詰バラ会員です）に「コンピュータと詰将棋」という題をお願いした。しかし小谷先生、仲々やりにくかったのではなかったかと思う。というのも主催者側としては、誰にでもわかる内容で、とお願いするしかないのだが、一方で詰バラ会員が百名も集まればコンピュータのブロー級がゴロゴロいるに決まっている。結局コンピュータによる詰将棋解図の基本的な考え方をお話ししていただいた。



最後の質問時間では、ひょっとして私あたりに全くわからない質問が出るのでは、と内心ヒヤヒヤだったが、なんとか無事に終了。仲々こころした講演をナマで聞ける機会はないと思うので、大変に貴重なお話だったと思う。

詰将棋オリエンテーリング

さていよいよ詰将棋の解答競争である。百名を越す解答競技をどうやってやるか、担当した私としては非常に悩んだのであるが、とてもじゃないが普通に記入した解答審査はムリという事で、詰将棋オリエンテーリングというのを考えてみた。

ルールは簡単で、まず最初の問題を解いて、その詰上りが仮に2三玉ならば、全部で8問ある中にひとつだけ2三玉形の問題があるので、次にそれを解いていくという具合。以下同じように詰上り玉位置で問題をたどっていき、解いた順に問題を並べるといふ、すな

わち詰将棋を使ったオリエンテーリングである。これならば解答が詰手順ではなく、①—②—③—④—⑤—⑥—⑦—⑧—⑨—⑩というように記号になるので解答審査がやりやすいし、参加する人も記入が楽という一石二鳥。

一番ヤリは森敏宏氏で、なんと説明が終わらぬうちに解答が来たのにはビックリ(別に早くても有利にはならないが)。30分ほどの時間内には、ほぼ全員がなんとか解き終えたようだった。実は途中で一題に余詰があると判明。ギクリとしたが、何と余詰順でも作意でも詰上り玉位置が同じという奇跡もあって、どうやら事なきを得た。

賞品は二上会長他の御協力もあって盛沢山。半数ぐらいの人が当選していたようで、名前を呼び上げられた人は皆ニコニコ顔。二上会長には抽選にまで御協力いただいて本当に恐縮。詰将棋をもっとやりたかった人には物足りない出題だったかもしれないが、この

大人数ではこの辺が限度かと思う。次の機会があれば更に工夫して出題しますので、とりあえず今回はお許ししたい。

大衆討論

せつかく百名も集まるのだから、何か建設的な事もやりたい。大衆討論という大げさなタイトルをふって見たが、実際に討論会をやれば、意見があまり出ないか、あるいは出すぎて全く収拾がつかなくなるかのどちらかであろう。だから全員が賛成できる内容を、ある程度司会者側の主導で進めさせていた。

テーマは「全日本詰将棋連盟の今後について」。少々大げさなタイトルだが、そんなに難しい内容ではない。鶴田主幹が亡くなられ、関東支部長の黒川氏、特別賛助会員の七條氏が相次いで亡くなられた今、全詰連はその柱のほとんどを失ってしまった訳である。

また詰将棋段級位や看寿賞選定などの問題点も多い。今後へ向けての組織の再建、また全詰連をどう活用していくかについて、森田正司氏から提起をうけ、柳原編集長から現状を説明していただいた。それ以上の事をここで決めるのは無理で、今後一年くらいかけてじっくり決めるといふ方向を示して、全体の承認を得て終了した。

非常に盛沢山のプログラムだったが、田代達生氏の閉会の言葉で幕をとじた。

懇親会

第三部は立食パーティーによる懇親会である。司会は私から角建逸氏にバトンタッチ。越智信義氏の乾杯の音頭でスタートした。

実はここからの私はレポーターになっていない。(というよりレポーターをやるなんて思ってもみなかった)というのも第二部の司会の役目が終わって緊張感から開放され、そこへアルコールが入ってブツンした状態だったのである。まあ正規のプログラムは終わっているのでお許し願いたい。

立食パーティーであるからあちこちに小人数の和ができる。私はそれらをハシゴしてまわっていた。壁には二上会長、伊藤果六段、山田修司氏の懸賞詰将棋が張り出されていたが、私と同様に詰将棋には目もくれず、飲んで食って話をしてきた人が多かったようだ。お酒の席にはどうかと思うほどの力作中長編で、あとで考えた時には大アセをかかされた。

伊藤果六段、堀口弘治五段の多面指し指導対局もあった。当初は5面指しでも10面でも、というありがたいお話であったが、実際は3面指しで行われたようである。誰が指したか、勝ち負けはどうか、など全く覚えていない、というより見てなかった。(ひどいレポーターだね)

途中で懸賞詰将棋の発表と福引があ

ったが、ここでもまた盛沢山の賞品があり、結局ほとんどの人が何か当たったようである。9時ごろ中締めが入ったが、一向にパーティは終わりそうもない。将棋を指す人、マンガの話を始めめる人(あつ、オレの事か)、しまいにトランプを始める人。私は途中でリタイヤしたが、12時に至って遂に強制排除に踏み切ったそうである。放っておくと翌朝まで続いたろう事は間違いない。まあ詰棋人同志で語り合うのは楽しいもの。ハメもはずしたくなるのはよくわかるのであるが。(そくいえば名古屋でもすごかったっけ)

— · — · — · —

最後に主催者側に不備、準備不足等色々ありましたが、こうして無事終了できましたのも、皆様の御協力のおかげと深く感謝しております。次にお会いする機会もまたあろうかと思えます。その時はどうかよろしくお願いいたします。

「大いなる発言」から

福田稔君最近大道棋を見なくなったと
の声がありました。私が私はずいぶん古
くから大道棋をやり、通算150勝
0敗という記録を持っています。0
敗というのは、解けない時は手を出

しませんから無敗なのです。(笑声)
古図式はだいたいぶんやりましたので、
雑誌はあまりありませんが、単行本
関係はほとんど揃っています。これ
から古図式の原典を知りたい方はど

全詰連全国大会

懸賞

記念詰将棋

※※※※※

※※※※※

〈締切〉8月5日消印

〈呈賞〉各題正解者2名に賞券千円
※番付戦は不適用です。

① 山田修司

9	8	7	6	5	4	3	2	1
	と	皇				と		王
							歩	皇
	歩	角	歩			歩	皇	歩
		桂						香

持駒 飛歩

棋欄を、費用がないので当時学生の角さんにやって貰っていたのですが、卒業して連盟に入るということで、後任に安くて早くても頼める人と紹介して貰ったのが柳田さんです。当時、1万円の予算しかないと言ったら「エッ、お金を貰えるのですか」と言われて驚いたことがあります。その後、彼はお金を目覚め、本を書いたら原稿料が幾らだとか印税は幾らとか聞いて来るのですが、やってみると将棋ライターはあまり儲からないので、後から追って来る人が少なく安心です。詰将棋では七條さん、黒川さんなどは旅行に御一緒したこともあり、若島さんともかなりお付き合いがあるのですが、私は作りません。家内の恵子はかなり詰将棋に熱中して夜もおそくまでやっているの、御仲間に入れてやってください。

角建逸 詰将棋に初入選したのは昭和

52年で、その年9月に詰将棋大会があり、50人ぐらゐの出席者でしたが、初めて詰バラの存在を知り、異様な人達だと思ったのですが、それから引き込まれてしまい、当時浪人だったのですが、当然また浪人です。

浜田君なども気を付けてください。

小谷善行 コンピュータの研究を大学でやっていますが、私も詰バラの会員です。

清水一男 去年5月5日に名古屋で大会をやったのですが、アツと言う間に1年が経ちました。今日盛大にやって頂いて来年は大阪と、毎年続けて頂くと良いと思います。良い作品を作って頂いて、こういう会がますます盛り上がるよう皆で頑張りましょう。

岡田敏 本日は入選三百回ということ、詰将棋王位という分不相応な称号を頂きました。ドイツの哲学者ヘーゲルの言葉に「量もある程度になれ

ば質に転化する」というのがあります。私も詰将棋の数だけは相当作りましたが、質が追い付きません。このことは自分で良く承知していますが、ヘーゲルの言葉を信じて、量が質に転化するよう祈りながら頑張って行きたいと思ひます。

二上会長 皆様の自己紹介を伺っていて、私も身につまされる様な気がしました。仲々詰将棋が詰まなくなつたというお話がありました、実は私も自分で自分の作品が詰まなくなつたことがあつたりしまして、現役を引退する気になつた……。これだけ原因ではありませんが、私の所にも有望な若手が育つて来ましたので、きびしい所は若手に任せ、こちらは裏方で番頭役に徹したいという心境になりました。私は詰将棋に関して趣味人です。趣味人としての心は失わぬようにして行きたいと思ひます。